

東京大学大学院総合文化研究科 グローバル地域研究機構中東地域研究センター
[スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座]



UTCMEs ニュースレター

VOL.24 2024

1. 巻頭言	1	4. 駒場中東セミナー開催報告	10
2. 学びの寄港地	2	5. パフワーン文庫便り	12
(1) 阿部 遥奈	2	6. スタッフ・発行者情報	12
(2) 橋本 藍	4		
3. この一品—私の研究モノ語り	7		
(1) 末森 晴賀	7		
(2) 原 陸郎	8		

1. 巻頭言

ガザ地区と世界

東京大学中東地域研究センター

特任准教授

鈴木 啓之

2023年の秋学期は、中東のニュースに心を痛める日々が続きました。過去に例を見ない規模の戦闘が、ガザ地区で続いたからです。パレスチナとイスラエルの事情に明るい（と思われる）専門家が、つぎつぎとメディアに登場し、情勢の見通しを語りました。かく言う私にも今回は声がかかり、メディアでの発言が増えていきました。テレビ出演する専門家を横目で眺めては、「間違っている」、「説明がわかりにくい」と自宅でコメントしていた学生時代を思い出し、出演のたびに肝を冷やしています。

ガザ地区は、なによりもまず、封鎖された地域です。私がアラビア語の学習を始めた2006年にはほとんど封鎖は完了し、旅行者が立ち入ることはまず不可能でした。ガザ地区の周囲は壁やフェン

スで囲われ、人の出入りは南北の二つの検問所で厳しく管理されていました。NGO職員やジャーナリスト、国連職員でもない限り、何度もガザ地区に足を運ぶことは考えられないことでした。物資の搬入も、建設資材から農業用の堆肥に至るまで、数や種類が制限され、ガザ地区内の経済発展は大きく阻害されていました。

一方、歴史的に見れば、ガザはエジプトからシリアに向かう街道の途上であり、周辺地域と結びついた開かれた街でした。イブン・バトゥータの『大旅行記』では、北アフリカの横断の後に、シリア地方の入口としてガザ（ガッザ）が登場します¹。

遂にわれわれはガッザの街に着いた。そこはエジプトに隣接したシリア地方の始まりの地で、町は雄大な

規模に誇り、素晴らしい市場を備えた人口の多いところである。また数多くのモスクがあるが、町を囲む市壁はない。かつてには華麗な大モスクがあったが、現在の金曜礼拝[の大集会]が行われるモスクは偉大なアミール＝ジャーワリーによって建設されたものである。このモスクは堅固な造りと高雅な姿で、そこに備えられたミンバルは白亜の大理石で造られている。

14世紀のこの記述は、ガザが交易の一大拠点であったことを伝えてくれます。1994年にパレスチナ暫定自治区に指定された時も、ガザ地区は世界に開かれることが期待されました。1998年には、日本のODAが投入される形で、ガザ地区に国際空港が建設されます。ガザ地区は「中東のシンガポール」になるのだという、勢いのある言葉もこの頃には聞かれました。地中海に面したガザ地区には、大規模な国際港を建設すること

¹ イブン・バトゥータ『大旅行記』（家島彦一訳）平凡社、第一巻、1996年、183頁。

も夢ではありませんでした。

ガザ地区の封鎖は、中東和平の機運が失われていくなかで徐々に強化されていきました。2000年の大規模衝突アル＝アクサー・インティファダと、その後のイスラエル軍によるパレスチナ自治区への武力行使が、一つの転換点です。2001年には、ガザ地区の国際空港が空爆を受け、使用不能になりました。この段階で、ガザ地区の空路は閉ざされたこととなります。また、2005年には入植地が撤去され、陸路も完全に遮断されました。海にも出漁可能区域が設けられ、イスラエル艦船による取り締まりが強化されました。ハマースがガザ地区の実効支配を始めるのは2007年のこと

です。

こうして封鎖され、世界から切り離されていくガザ地区に、国際社会は冷淡であったとすら言えます。ガザ内部からは、封鎖を終わらせようとする行動が何度か起こされました。2008年にはエジプトとの境界線で壁が爆破され、数十万人のパレスチナ人がエジプト国内に流入しました。また、2018年には、「帰還の大行進」と名づけられた大規模抗議活動が、イスラエルとの境界近くで行われました。しかし、いずれの動きも、ガザ地区の封鎖解除を実現することはありませんでした。10月7日にハマースなどの武装戦闘員が境界を破ってイスラエル領内に侵入した出来事は、この系譜の

なかで理解される必要があります。

ガザ地区での現在の破壊は、さまざまな観点から過去最悪の状態になっています。その破壊のなかで、12月7日にはあるモスクが空爆で破壊されました。先ほど引用したイブン・バットウータが言及し、かつてガザが街道の拠点であった頃を偲ばせる大モスクです。ガザ地区がかつて世界にひらかれていた記憶も、破壊の対象になっていると言って構わないでしょう。ガザ地区が世界から隔絶され、忘れられていくなかで今回の事態は生じました。再び同じ悲劇を繰り返さないためには、世界が再びガザ地区に向き合い、またガザ地区が再び世界に開かれてく必要があると考えています。

2. 学びの寄港地

(1) 思考の砂漠を彷徨う

東京大学教養学部教養学科地域文化研究分科アジア・日本研究コース

阿部 遥奈

私は2023年の9月から2カ月間、アラビア語を習得するためにオマーンのスルタン・カーブース・カレッジに留学しました。私は以前からアラビア語の学習に興味があり、大学入学時から約2年半アラビア語を勉強していたものの、大学の授業では主に文法と読解のみを学んでいたため、現地で実際にアラビア語の会話を学んでみたいという憧れを抱いていました。そんな時、以前このプログラムに参加していた先輩から体験談を聞いたことをきっかけに、今回の語学留学に行くことを決意しました。

このプログラムは毎年5回実施されており、毎回さまざまな国から約30名前後の学生を受け入れています。今までに受け入れた学生数は約1500名のほり、参加者の出身国は60カ国にも及ぶなど、非常に国際的なプログラムとなっています。私が参加した第48回プログラムにおいては、ロシアやカザフス

タンを中心に17カ国から37名の学生が留学に来ていました。大学生がほとんどでしたが、中には仕事や移住の関係でアラビア語を学ぶ必要がある社会人なども参加しており、年代は18歳から40代までさまざまでした。日本で生まれ育ちあまり海外経験がなかった私にとって、多種多様なバックグラウンドを持つ人が集まる国際色豊かな環境に身を置けたことはとても貴重な経験でした。

カリキュラムに関しては、8週間にわたって綿密な予定が組まれており、平日（日曜から木曜）には授業、週末（金曜と土曜）には課外学習が実施されていました。平日の午前中には、正則アラビア語（フスハー）による読解・作文・会話・リスニングの授業がおこなわれ、午後には大学が選考したオマーン人のランゲージパートナーとペアになり会話を練習する時間や、オマーンの伝統文化や方言を紹介するイベントなどが設けられていました。また、毎週末には、博物館やモスクなど各地の観光地を巡るツアーが催されました。参加は任意でしたが、ほとんどの学生が参加していました。

写真1：同じクラスの友人、先生と。



授業は初級・準中級・中級・準上級・上級・超上級の6つのレベルが設定されており、事前に受けたオンラインのテストと面接の結果をもとにクラスが決まります。参加者の人数に応じて開講されるレベルは変わるのですが、今回は初級・中級・準上級・上級の4つのクラスが開講されました。私は事前テストの結果では準中級レベルだと判断されたものの、人数の不足のために準中級クラスが中級クラスに合併されたため、中級クラスに参加することになりました。授業内容は、毎週異なるトピック・テーマに沿って語彙の学習・ディスカッション・プレゼンテーション・作文などをおこなうというもので、体系的に学べるように構成されていました。

しかし、1つ上のレベルでの学習になったこともあり、毎日の授業は非常に難しいものでした。私はスピーキングと

リスニングの学習をほぼしてこなかったため、授業での会話には全くついていけませんでしたが。聞き取ることができるいくつかの単語を拾うだけで精一杯で、ともに会話に参加できないことも多々ありました。そこで、他の留学生やランゲージパートナーとゆっくり会話の練習をしたり、授業中に何度も登場したフレーズを少しずつ学んだりすることで、経験を積んでいきました。不思議なことに、毎日アラビア語を聞き続けるうちに特有のリズムに慣れていき、4週目にもなると授業で先生が話す内容のほとんどを理解できるようになりました。アラビア語の世界に自分を浸すことで、アラビア語をアラビア語のままに理解し、他言語を介することなく発話する癖ができたように思います。自らの母語を断ち切り、習得したい言語をシャワーのように浴びることができるという点で、語学留学は非常に価値のある選択肢だと感じました。

毎週末の課外学習では、首都マスカットをはじめ古都ニズワや湾岸都市スールなど、オマーン北東部のさまざまな観光地を訪れることができました。オマーン各地を訪れたなかで印象に残っているのは、豊かな自然です。オマーンでは、日本では見ることでできない全く異なる自然を見ることができました。まず、大学があるマナという町から他の都市へ移動する時に必ず目にしたのは、岩でできた山の数々でした。オマーンにはハジャル山地（アラビア語で岩の山）をはじめ、ごつごつとした岩山が多く存在しています。山といえば緑に覆われた姿を想像していた私は、道路の両端に連なる岩山を初めて目にした時にとっても驚きました。しかし、屈強な印象を与える岩山ばかりではありません。ジャバル・アフダル（緑の山）のように、標高が高いために降雨量が多く、低木が茂りザクロやバラが育つ場所もあります。また、山と山の間にできた谷には、地元の人がピクニックや水泳を楽しむオアシス地帯もありました。このように、中東といえば思いつく砂一面の乾燥した世界だけではなく、岩・緑・水が織りなす独特の自然を体感することができました。もちろん、オマー

ンには広大な砂漠が広がっていますが、実際に足を運んでみると、そこには低木や棘状の植物が生えており、砂漠の環境に適応した植生が存在することがわかります。私が訪れたシャルキーヤ地方の砂漠では、棘だらけの枝に生えていた小さな黄色い花がとても美しく力強い印象を受けました。課外学習で訪れる場所には、有名な観光スポットはもちろん、オマーン人だからこそ知っている地元ならではの場所も含まれています。そのため、観光客として行くだけでは知ることのできない、留学生としてその国に住んだからこそ得ることができた気づきがたくさんありました。

写真2：ジャバル・アフダルの景色。
古い遺跡が残る。



日本人であるということ

オマーンに滞在していた間、私が「日本人である」ことを考えさせられる体験が多々ありました。今回のプログラムに参加した日本人は私1人しかいなかったため、ことあるごとに日本人に対する評価や眼差しを一身に浴びることになりました。そして、日本人というアイデンティティに何度も助けられ、また日本人

であることについて何度も悩みました。

ある日、授業の一環で現地の女子小学校に見学に行った時のことです¹。私が日本人だとわかるや否や、数えきれないほどの学生に握手を求められ、「こんにちは」「かわいい」「ありがとう」と声をかけられました。オマーンでも日本のアニメの影響力は大きく、子供たちはアニメから日本語を学んでいたのです。また、ある日利用したタクシーの運転手に日本人だと伝えた時には、日本車の素晴らしさを語られ、たちまち距離が縮まりました。このように、「日本人である」というだけで無条件に好印象を得ることが多く、日本人というアイデンティティを持っていることによって得をする場面がほとんどでした。彼らが日本に対して思っている良い評価は、私が日本人として見てきた日本よりもよほど素晴らしいものに聞こえ、その温度差に戸惑いを隠せませんでした。それだけでなく、先人達が築き上げた日本の評価にタダ乗りしているような気持ちになり、日本人として自分があるべき姿は何なのかと頭を悩ませました。

日本人としてどうあるべきなのか、という問いを考えると同時に、日本とは、日本人らしさとは何なのかという問いも浮かび上がってきました。ある時オマーン人の先生に質問した時には、「日本人の学生は皆礼儀正しく真面目で良い。課題や自習をちゃんとやってくる」と声をかけられました。一方で、ある夜膨大な課題に疲れ切った私がカザフスタン出身の友人に「今日は疲れたからもう何もせずに寝てしまいたい」と愚痴をこぼした時には、彼女から「そんなことを言うなんてあなたは日本人らしくない。日本人は『過労死(karo-shi)』してしまうほど、ずっと真面目なんですよ」と言われたのです。自分の真面目さをポジティブな日本人らしさとして評価されることもあれば、一般的に考えられる真面目さから外れた時には自分の日本人らしさを否定されることもある。このような状況に、日

¹ オマーンでは、イスラーム教における見知らぬ男女の交流を避けるという慣習から、男女別の公立学校に通います。

本人というアイデンティティは何を意味するのかと思いを巡らせました。

自分が日本人としてどうあるべきなのか、という問いに対しては、今まで日本そして日本人が培ってきた良いイメージに誇りを持ちつつ、謙虚な姿勢で新たな好印象を与えること、それが現時点で私が日本人としてあるべき姿だと思うようになりました。一方で、日本人らしさとは何なのか、という問いへの明確な答えを見つけることは結局できませんでした。しかし、日本人であることに関してさまざまな悩みと葛藤を感じたということ自体に意味があったのだと思います。オマーンという異国の地でマイノリティになるという体験をしない限り、私がこのような思考をすることは無かったでしょう。実際にマイノリティの立場になり、日本人としての代表性を求められるという貴重な経験をすることができて非常に良かったです。

写真 3：砂漠でのピクニック。
コーヒーを片手に語り合う。



アラブの「今」を生きる

私がオマーンに滞在していた 2023 年 10 月の初旬、イスラエルとパレスチナの武力衝突が始まりました。その日から、寮の食堂で流れるニュースは全て、パレスチナ自治区ガザからの中継や研究者による解説一色に染まりました。あの朝、ルームメイトといつも通り朝食を食べに向かったときに見たテレビ面に広がる炎と煙、そしてその衝撃を忘れることはできません。

オマーンは政治的に安定しており、他のアラブ諸国と比べるとパレスチナから地理的にも離れているために直接身の危

険を感じることはありませんでした。しかし、その日以来、外務省や在オマーン日本国大使館から安全確保に関する注意喚起がメールで届くなど、パレスチナ情勢について身近に考えることが格段に増えました²。また、犠牲者への追悼の意を示すためにプログラム卒業祝賀パーティーが中止になったり、オマーン人の友人からパレスチナ連帯を呼びかけるデモのステッカーをもらったりと、彼らの関心の高さを肌で感じました。さらには、留学生同士でそれぞれの出身国の政府がどのような対応をしているかを議論することもありました。

このような、身近な場所で国際的に重要な事象が起こるという経験は、私の中東に対する意識に大きな影響を与えました。中東地域に興味を持ち、大学の授業をはじめ中東に関してさまざまに学んできましたが、私は学んだ政治や歴史をどこか教科書の 1 頁のように別次元のもののように捉えていたことが多いように感じました。しかし今回、現代アラブ世界を舞台に動き続ける「今」の歴史を直に感じ、その「今」起こっていることに真摯に向き合う人々と接する中で、現代の事象について当事者意識を持って考える意識が芽生えました。それだけでなく、歴史上の出来事の内に包み込まれ語られなくなった人々の存在を忘れ去ってはいけないと考えるようになりました。このイスラエルとパレスチナの武力衝突が歴史として語られる時には、私が目にした人々の活動も全て捨象されてしまうでしょう。しかし、その歴史の中を生きただけの人々の営みに思いを馳せることを忘れずに、中東の歴史と向き合っていきたいと思っています。

言語は人を繋ぐ

2 カ月間というわずかな期間でしたが、語学力において期待以上の成果を得ただけでなく、濃厚な思考の旅をおこなうことができました。今回の滞在でこんなに豊富な経験を得ることができたの

は、やはり言語を介して語り合うことができたからだと思います。日本語・英語・アラビア語などお互いの言語を駆使することで国籍の垣根を超え、深い交流をすることができました。自分のアイデンティティや歴史認識について考えたことなど、オマーンで体験したことの全てを糧として、今後も勉学に励みたいと思います。

(2) フォトジェニックの奥にある風景： サマルカンド・ブハラ・タシケントを訪れて

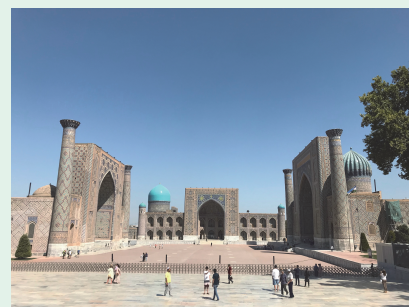
東京大学教養学部教養学科地域文化研究
分科アジア・日本研究コース

橋本 藍

ウズベキスタンといえば青の都サマルカンド、古都ブハラ。シルクロードのオアシス都市。世界史の教科書やガイドブックには、精巧な建築美術の写真とともにそんなロマン溢れる文字が踊る。しかし、ウズベキスタンへの旅を通じ私が触れたのは、フォトジェニックな光景だけからはわからない、多層的な社会だった。

観光産業とイスラームのあり方

ウズベキスタンのランドマークといえば、世界遺産・サマルカンドを中心とした宗教建築であろう。その絢爛さはじかにみると格別であり、晴天とちょうど同じ色あいのサマルカンド・ブルーは思わずため息が漏れ出るほどの美しさで、旧市街の中心に座する巨大なモスクやマドラサには多くの観光客がやってくる。



² 外務省海外旅行登録「たびレジ」に旅行情報を登録すると、滞在先の最新の安全情報をメールで受け取ることができます。

観光需要に応え、レギスタン広場などの使われなくなったマドラサは今や観光用施設に生まれ変わり、神学生やウラマーの居室であった小部屋一つ一つに土産物屋が軒を連ねたり、ホテルとして観光客に寝床を供したりと商魂たくましい。「イスラームっぽさ」を演出するためか、アラビア文字風に飾ったラテン文字も何箇所かで見つけ、観光材料としてイスラーム文化が最大限活用されている。美しい装飾と積み重ねた歴史や宗教性に圧倒されるのかと思いきや、資本主義の印象が強く残る観光的一幕であった。

無論、宗教性が消え去ったわけではなく、むしろ人々の日常に息づくイスラームへの信仰を感じる場面は多い。観光地化された中心部のモスクでも定刻になると街の人々が礼拝につどい、いくつかのマドラサは現役で宗教学校の役割を果たしている。特にブハラでは、住宅街の細い路地裏にもいたるところにモスクや聖者廟がある。色鮮やかな装飾こそないが側を歩くと賑やかな声が漏れ聞こえ、礼拝の場としても人々のコミュニティーの場としても活気に溢れた様子が伝わってきた。かつてモスクやマドラサとして使われていた廃墟もそこに残っており、一般住宅に混じって「～世紀建造のモスク」などのプレートが打ち付けられた建物が鎮座し、学問都市として栄えた歴史を静かに今へと伝えている。



またスーフィー教団の影響が強い中央

アジアには聖者廟信仰が根付いている。ウズベキスタンにも聖者廟や時の権力者の廟が多数作られ、今も祈りの場として機能していた。モスクやマドラサで礼拝中に闖入するわけにはいかないが、廟であれば観光客も参拝することが可能で、人々が思い思いに祈りを捧げている様を見学することができた。筆者はサマルカンドの聖ダニエル廟を訪れたが、老若男女が輪になってドゥオ（祈りの言葉）を唱える様子に感銘を受けた。

廟から見えるナショナリズムと独裁

前項で廟に触れたが、豪華な廟に葬られているのは何も伝説上の聖人に限らない。時の権力者が権威を示すため建築したのも多数ある。なかでもひとときわ豪華なのがサマルカンドの南に位置するグーリ・アミール廟、そしてサマルカンドの北側から旧市街を一望するイスラーム・カリモフ廟である。

グーリ・アミール廟は、14世紀後半から16世紀初頭にかけて中央アジアを支配したティムール朝の歴代君主が眠る廟である。ウズベキスタンは独立後、ティムール朝の初代君主ティムールを自らの英雄と位置づけており、ティムールは独立後のウズベキスタン・ナショナリズムを象徴する存在と言える。大量の金箔を用いてグーリ・アミール廟を改修し、街の中心に巨大なティムール像を立てたのは全て独立後のことであり、歴史博物館での展示も他の時代に比べて異様に気合が入っていた。皮肉にもティムール朝を滅ぼしたのはウズベク遊牧集団であり、現在のウズベク人の祖の一端を占める人々であるが、民族の英雄というよりもこの土地に君臨した英雄という解釈でティムールを崇拜しているという。

イスラーム・カリモフ廟は一帯の廟のなかでもっとも新しく、もっとも鮮やかな色彩を纏っているが、他の廟とはちがって警察が常駐し写真撮影が禁止されてい

る場所で、異質なもののしさを放っている。この廟に眠るのはウズベキスタン共和国の初代大統領、イスラーム・カリモフである。

中央アジアは独裁政権国家が多い。ウズベキスタンも例外ではなく、ソ連解体と独立という大波乱のなか権力を手にしたカリモフが25年もの長期間にわたって大統領を務めた。カリモフの死後、ウズベキスタン政府は「記憶の永久化」を進めており¹、豪華な墓廟に葬ったこともその一環である。ティムール称揚などのナショナリズムを巧妙に用いて独裁を賛美する姿勢も見られ、たとえばタシケントの国会議事堂近くに立つティムール像のそばには、この像を建てたのがカリモフであると記した看板がこれ見よがしに立っていた。

なお、カリモフは世俗国家を志向し、独立後勃興したイスラーム主義運動を厳しく弾圧した²。前項で取り上げたマドラサの観光地化はその影響とも言えそうだ。

多民族共生と地域文化

ウズベキスタンは多民族国家である。基幹民族であるウズベク系住民を中心に、タジク系、カザフ系、ロシア系、朝鮮系、ムスリム、キリスト教徒、ユダヤ教徒など、多くのルーツやバックグラウンドを持つ人々が暮らし、国をあげて100以上の民族が共存する社会を実現しようとしている。

近代以前の中央アジアの民族意識は曖昧であったことが知られている。特にウズベク人は「ウズベク人」という民族的なまとまりよりも都市や部族への帰属意識の方が高かったことが指摘され³、ウズベキスタンとひとこと言っても地方や都市ごとに生活文化は異なる。翻って、たとえ民族や宗教が異なっていたとしても同じ地域の住民は同じような生活文化を持って暮らしていたということであり、ブハラのシナゴグでは「近代以前

1 帯谷知可「サマルカンドのイスラーム・カリモフ廟を訪れて」、『日本中央アジア学会報』、14巻、2018年、59-66ページ

2 小松久男「激動の中のイスラーム 中央アジア近現代史」、山川出版社、2014年、98-99ページおよび104-108ページ

3 塩谷哲史「ウズベク人」、小松久男編著「テュルクを知るための61章」、明石書店、2016年、116-119ページ

のユダヤ教徒は礼拝以外の点でムスリムとほぼ同じような生活文化を持ち、共存していた」という話を聞くことができた。

生活文化に根ざした地域差は観光客でも十分味わうことができる。たとえばお土産物として人気のスザニ（刺繍布）の柄は、柘榴のブハラ柄、円と花モチーフのサマルカンド柄など地域色が強い。また主食のパン、ナンも街によって食感や模様が異なり、手軽に食べ比べて地域差を感じられる。

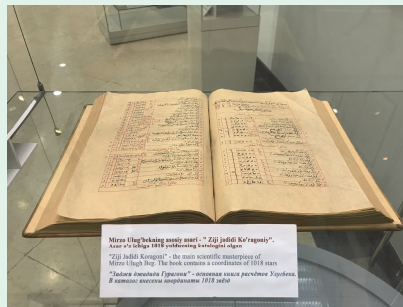
一方、ロシア系住民と朝鮮系の多くは、近代以降ロシア帝国時代の入植やソ連の強制移住政策によって中央アジアにやってきた人々である。レストランのメニューにはシャシリック（串焼き肉）やプロフ（焼き飯）などの中央アジアらしい料理とともにボルシチやプリヌイ（ロシアのクレープ）などロシア料理が並び、バザール（市場）では大量のキムチが売られており、共存や融合の一端を垣間見られる。

ことばをめぐる多民族共生

多民族国家で重要なファクターとなるのが言語政策であろう。現在ウズベキスタンで公用語とされているのはウズベク語だが、住民の多くはロシア語母語話者でなくてもロシア語を話すことができる。観光客相手はもちろん住民同士の会話でもロシア語を使う場面を多く目撃した。この背景にはもちろん、ソ連時代の言語体制がある。

ソ連時代、ウズベキスタン・ソビエト社会主義共和国ではウズベク語に加えてロシア語が公用語とされていた。独立後の現在も、一定数のロシア語母語話者がいるほか、多民族国家の共通語やロシア語話者の観光客に対するコミュニケーションツールとして、ロシア語は広く使われている。博物館や鉄道など公的な場

や観光地では、ラテン文字のウズベク語に加えてロシア語、英語での3言語表示が一般的である。写真はサマルカンドのウルグ・ベク天文台博物館で撮ってきたものだが、ここでも写本の説明文は3言語が併記してあった。



余談だが、筆者は書店でウズベク語でのアラビア語入門書を買いた求めた際、「ウズベキスタンではみなアラビア語を話すのか」と尋ね、「まあまあだ」との回答を得た。はたして「まあまあ」がどの程度のレベルなのかは甚だ怪しいが、少なくともアラビア語が共通語として使われている場面を見ることはなく、ロシア語の独壇場だった。

主にウズベク人が母語とするウズベク語は、かつてアラビア文字で記されていたが、20世紀前半にロシア語と同じキリル文字表記が一般的になった⁴。識字率の向上や近代化は、キリル文字表記のウズベク語とロシア語が公用語だった環境で行われたのである。ところが、ナショナリズムの風潮とロシアから一定の距離を取ろうとする姿勢のもと、独立後のウズベキスタンではロシア語が国家の定める公用語から外れ、1993年にはウズベク語を英語などと同じラテン文字で表

記する法律が作られた。

しかし、国が決めたからといって慣れ親しんだ文字をいきなり変えられるものだろうか。しかも、人々は日常生活で共通語としてロシア語をよく使っており、キリル文字に触れる機会が多い環境である。

旅の中で、ラテン文字への文字変更はまったく完了していないことがわかった。案内看板や街頭広告はほとんどがラテン文字表記のウズベク語で書かれているが、手書きの看板やレストランのメニュー、書籍などにはキリル文字のウズベク語が多く使われる印象を抱いた。複数の本屋を覗いてみたが、教科書や参考書などはラテン文字ウズベク語で書かれているものの、それ以外の学術書から小説、料理本に至るまで、書籍の世界はキリル文字表記のウズベク語かロシア語が圧倒的に多い。1993年のラテン文字化決定から30年がたってもこの状態である。今後もしばらくラテン文字とキリル文字の混合した状態が続くのではないだろうか。

「ウズベキスタン」と検索すると、観光名所のフォトジェニックな写真が多く出てくる。しかし、観光名所たるモスクやマドラサ、墓廟は、積み重ねた過去の歴史と現在の信仰心、政治やナショナリズムが深く絡んで、今そこに存在するのである。観光客が何気なく触れる土産物や食事、道案内の標識や博物館の展示もまた、多民族、多文化が共生する土壌の上に成立している。ただ美しい光景に感動するだけでなく、ウズベキスタンの多層性に触れる旅となった。

4 オリヴィエ・ロワ著、斎藤かぐみ訳『現代中央アジア：イスラム、ナショナリズム、石油資源』、白水社、2007年、41ページ

3. この一品—私の研究モノ語り

(1) デジタル時代における、^{なま}生の史料に触れること

日本学術振興会特別研究員 PD (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

末森 晴賀

わたしが学部か修士の頃か、ある東洋史の大御所の先生が来て、「最近では史料がデジタル化されたから、わざわざ現地に行って現物を見に行かなくても、机の前でパソコンに向かえばそれで研究が完結してしまう。黴の生えた古びた文献を一枚ずつめくることが歴史学の醍醐味なのに」と半ば不満そうに仰ったことがある。

わたしは正直、古書に触れるのが好きではない。前に何かの機会で図書整理を手伝った際、古い本に触れて真っ黒になった指先を何度も洗いながら改めて思った。何となく歴史学の掟に反しているような気がしたから、そのような気持ちを口にすることはなかったが、正直史料読解をデジタルデータで済ませることができたらそれでいいのにと思っていた。

オスマン語史料のデジタルデータ化

そうした思いを心の中に留めたまま、2017年の冬にトルコ・イズミル留学へ旅立った。クーデターで渡航が半年遅れたため、大急ぎでついて行くことになった語学学校の授業がようやく終了した頃、史料調査のためイスタンブールにひと月ほど滞在した。当時は「首相府」を冠して呼ばれていたオスマン文書館やスレイマニエ図書館、イスラーム研究センター iSAM を中心に調査を行った。渡航前から聞いていた話ではあったが、これらの文書館や写本図書館の史料は、以前はいざ知らず、その時にはデジタル化作業がかなり進んでいて、利用者はそれを文書館や図書館のパソコンで閲覧することになっていた。そのようにデジタルデータ化された史料をトルコ国民であれば遠隔地からでもオンライン上で見るができるが、外国人はそれができない。トルコのそれもイスタンブールまで来

て、結局机のパソコンに向かってマウスを動かすだけか、と思ったものである。

とは言え、史料がデジタル化されていることには利点もある。例えばオスマン文書館所蔵のオスマン文書の場合、内容の正確さを別としても、文書内容の要約が一点ごとに付されている。それをもとにキーワード検索をすれば、大量の文書の中から自分の関心のあるものを見つけ出すことができる。特に文書のように無数に存在する史料を用いる際には、史料の当たりをつけるうえで便利な方法にもなろう。留学したばかりの頃は、研究テーマもぼんやりしていたので、この方法を用いてとにかく関心のありそうな事柄に関する史料を片端から集めていた。その中で見つけ出した文書の一つが、19世紀末～20世紀初頭頃に作成された「ネコに襲われた人の記録」であり、近代以降の公衆衛生に対する関心の高まりから野良犬の取り締まりが行われる中で、猫もまたその対象になったのであった。これもトルコに来て日本とは桁違いに多い野良犬・猫に触れてのことである。

ところが、そうした放縦な史料調査を終えてイズミルに戻った後、イスタンブールで大量に入手した史料のデジタルデータを前にして、ほとんど読めないことに直面した。日本にいた頃はアラビア文字で書かれたオスマン語史料と言っても、活字化された刊本の史料を主に読んでいたため、写本やワクフ文書などの「きれいな」筆跡の史料はよいとして、書き手がおそらくスピード感をもって書いた台帳の類はさっぱり読めない。

取ってきた文書史料を読めないのでは仕方がないので、受け入れ先の先生にも教を乞いつつ、先生が学部生向けのオスマン文書読解の授業でも使っているというオスマン文書教本を入手して、それをもとに解読の訓練をすることにした。文書の種類によって書かれた書式も異なるため、様々な文書の書式例を集めたものがこの教本である。それぞれにはラテン文字転写が付されているため、オスマ

ン文書の文体と転写の内容を見比べるということを繰り返した。しかし、これを続けていくうちにいくらか上達が見られたものの、一旦教本から離れて収集したデジタルデータの史料に向き合うとまだまだ判らないところが多かった。

地方の写本図書館

そうして留学生活も折り返し地点が来た頃、せっかくだから地方の図書館を見て回ろうと思い立った。わたしの専門とするオスマン朝関係の史料は、ほとんどがイスタンブールかアンカラに集中しており、留学や史料調査の拠点となるのはこの2都市である。わたしはイズミルで留学生活を送っていたので、この際イズミル周辺の地域を中心にイスタンブールにないものを見ることにしたのである。

イズミルにも手稿本や写本を保管している図書館は1軒あるが、イスタンブールの図書館に比べて大規模であるとは言えない。また、巷の古本屋には近隣から出て来た手稿本が集まっていたが、果たしてどれほどの価値があるのかも分からない。イズミル周辺の市町村にも写本なりを置いていたと言われる図書館が点在するも、既に現物はイスタンブールなどに移動されて今はないという。

その中で、イズミルより内陸にあるティレという町に、ネジブ・パシャ図書館なるものがあることを知った。これは19世紀前半にネジブ・パシャというオスマン官人によって建てられた私設図書館であり、今はトルコ共和国ワクフ総局の管轄下にある。わたしはここに、イズミルから電車やミニバスを乗り継いで約2時間かけて来た。当時の姿が偲ばれる建物の玄関を入ったところが閲覧室になっていて、その奥の部屋が写本の並ぶ書庫である。中には一万点以上の書籍が収蔵され、そのうち写本は2,000点以上をかぞえる。12世紀に遡るとされるイブン・スィーナーの写本もある。図書館の司書に書誌情報を伝えることで、写本の現物を見ることができた。ただし、閲覧の際には手袋の着用が必須である。この図書館については調査記があるので、詳しくはそちらを参照してほしい[末

森晴賀、荒井悠太「トルコ・ティレのネジブ・パシャ図書館調査記：地方に存在する写本図書館」『イスラム世界』94、2020年12月、pp. 59-68】。



ネジブ・パシャ図書館での写本との出会いは、おそらくトルコで初めて現物を手に取ったと実感できた出来事のように思う。イズミルの図書館や古本屋でも手稿本は目にしてきたが、ネジブ・パシャ図書館の立派さや司書の方の本に対する気遣いも相まって、写本のもつ迫力を感じることができた。しかし一方で、写本が手袋一枚の向こう側、自分と隔たったところで管理されている感じがして、写本の存在をリアルに実感できなかった点も否めない。

クレタ島へ

オスマン語史料の多くはトルコ国内に集まっているが、国外にも存在する。当時オスマン朝－ヨーロッパ関係史の延長線上でクレタ島にも興味を持っていたので、クレタ島の主都イラクリオン（オスマン朝時代は「カンディエ」）にあるヴィケリア図書館に向かった。ここには、オスマン朝統治時代に作成されたシャリーア法廷台帳が百数十冊保管されている。



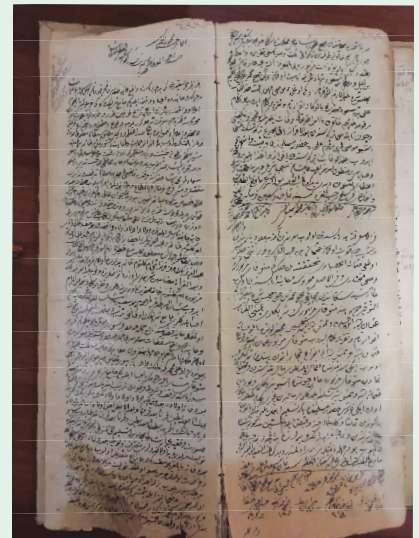
ヴィケリア図書館に着くと、ギリシア

語はできないので拙い英語で用件を伝え、法廷台帳のある部屋に通してもらった。そこは書庫のような場所で、古い文献などを陳列した棚の側に作業机があり、そこで数名の司書が作業をしていた。法廷台帳は棚の一角に並べられており、そこにある台帳を好きなだけ見たいと（おそらく）言われたため、古いものから順番に取り出して閲覧することにした。先にネジブ・パシャ図書館を訪れた時にそうであったように、手袋をする必要があるかと尋ねると無いと言い、写真も自分のカメラで好きなだけ撮影してよいと言う。撮影した史料の情報や用途を報告する必要もなかった。時間があまりないのでとにかくひたすら台帳の頭から写真を撮っている間、彼らは隣でお菓子を食べていた。トルコの図書館では史料の実物を拝めることはほとんどなく、見ることができたとして手袋を付けることが決まりになっていたから、同じオスマン語史料をめぐる扱いの違いに驚いた。ギリシアの方ではオスマン朝の歴史は「国史」ではないため、史料に対して特別な感情はないということであろうか。

ヴィケリア図書館では短期集中で台帳の撮影に徹したため、史料に出会えた余韻を味わう時間もなかったが、写真を撮る合間にも確認のため史料の本文に目を通すこともあった。すると、台帳のデカテカした紙の上に黒いインクで書かれた文字がはっきりと浮かび上がってくるのを感じたのである。書き手の息遣いが感じられたためか、気楽な環境で実物に触れることができ対象への愛着が生まれたためかわからないが、どういわけかすらすらと読めるようになっていたのである。イズミルに戻ってから史料の写真を見ると読める、先にイスタンブルで入手した史料のデジタルデータを見ても読めるのである。

史料をデジタルデータにしてパソコンで見ると、史料のスケール感がパソコンの画面に収まるよう画一化され、紙の風合い、インクの染み具合といった視覚の機微も極めて平坦にされる。様々な書き手が各々の書き方で多種多様な紙媒体

に書き、それを当時の人が読んでいたのだから、きっとわたしたちもそのままに読むのが良いだろう。留学前に先生から言われた「史料の実物を縮くのがたのしみ」という言葉が、史料への敬意とともに、史料を読めるようになるという実用的な面からも、ようやく理解できるようになったと思う。



(2) オンライン生活から抜け出して： コロナ禍明けの資料調査

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科一貫制博士課程 原 陸郎

私が大学院に進学したのは、コロナ禍の始まりと時期がほとんど同じである、2020年度であった。前期が始まったのも1ヶ月遅れたゴールデンウィーク後であり、しばらくの間は完全なオンライン生活を送っていた。私が所属する京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科は、博士予備論文（修士論文に相当）執筆のために臨地調査を行うのが常であったが、それも実施することができなかった。とはいえ、幸か不幸か私はイスラム世界でも広く名の知られた学者を研究対象としていたため、資料が足りないということはあまりなかった。むしろ、既に手元にある資料の読解に四苦八苦していたのが現実であったが、それでもいつか訪れるであろうフィールドワークを心待ちにしながら、オンラインとオフラインを

往復するような院生生活を送っていた。

そうこうしている間に博士予備論文も書き終え、博士論文に向けて今後の研究をどのように進めていくかを考えていた頃、コロナ禍も一旦の落ち着きを見せ始めていた。しかし、いざ渡航が解禁されると、どこでフィールドワークを行うべきか考えあぐねていた。私の研究は前近代ハンバル学派のスーフィズム思想伝統を対象とするものであり、ハンバル学派に主眼を置いたものにすべきか、それともスーフィズムにするべきか、といった具合である。色々迷った末に、ハンバル学派関連文献を豊富に有するサウディアラビアを調査地に選び、その首都リヤドで2023年1月末から約1ヶ月間の資料調査を実施することにした。ハンバル学派についてだけでなく、スーフィズムを否定するワッハブ派を奉じるサウディアラビアにおいて、スーフィズム関連文献がどのように扱われているのかを調べるためでもあった。また、同国は2019年9月に観光ビザを解禁し始めたものの、コロナ禍と重なったこともあり、これまでに訪れる機会がなかったということも選択の一助となった。

いざ現地へ

コロナ禍がまだ完全には明けておらず、また近年まで観光ビザを発給していなかったということもあり、入国には一抹の不安があった。しかし、水際対策のためにワクチン接種証明書が求められるなどしたが（2024年1月現在では不要）、パスポートとビザを提示すると呆気なく入国することができた。渡航した時期は多くの観光客が訪れるというリヤド・シーズンが終わりに差し掛かろうとしている頃で、入国審査も手慣れた様子であった。

リヤドでは、中心部のウラヤー地区に位置するキング・ファハド国立図書館(Maktaba al-Malik Fahad al-Wataniya)で主に調査を行った。建物は荘厳で、一見図書館とは分からないような現代建築であり、急速に発展していくリヤドの街並みになじんだ印象を受ける。リヤドには数多くの図書館があるが、その中でも

この図書館が最大のものであり、刊本や写本、マイクロ資料、映像資料など、200万点を超える資料を所蔵しているそうだ。利用するには予約は要らないが、1階の受付で登録を済ませる必要がある。

利用者が主に滞在するのは、最上階の4階だろう。書架は目の前に見えているが、ほとんどが閉架のため、本を手に取りたい場合は職員に必要な資料を伝えなければならない。しかし実際には、この本が見たいと伝えると場所だけ教えられて、自分で取りに行けることもしばしばあった。また、4階にない資料については、内部のエレベーターを使用するとアクセスすることができるが、わかりやすいとはいえないので職員にお願いした方がいいだろう。

渡航前から想像していた通り、ここでハンバル学派関係の資料を見つけることは容易であった（スーフィズム関連資料については後述する）。もちろん、近年ではインターネットを利用して数多の情報を拾い集めることは可能である。しかし、サウディアラビア国内で刊行されたものや博士論文、図書目録など、現地の図書館でなければ手にすることができないものは多くある。まだまだアクセスしきれないほどの資料が溢れているが、現地調査の重要性を身をもって実感した。

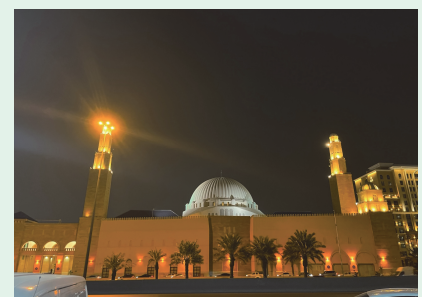
進むデジタル化



リヤド滞在中には、キング・ファハド国立図書館の近くにあるキング・ファイサルセンター(Markaz al-Malik Fayṣal)にも訪問する機会を得た。複合施設の2階にあるため場所は少しわかりにくいですが、近くに標識があるのでそれを辿るとよいだろう。貴重な写本などを展示する美術館も併設している研究所であり、研究者が多く訪れる場所である。

必要な写本が何点かあったため受付の職員に見せてほしいと頼むと、写本カタログやレファレンス資料が一面に配架された、マイクロリーダーが置かれている部屋に案内してもらった。開発が進むリヤド中心部にしばらくいた後では、少し懐かしさを覚えるような部屋であった。しかしそうした外見とは異なり、あらかじめ用意しておいたリストを手渡すと、USBメモリを手渡すように言われた。聞けば、デジタル化を進めているそうで、センターが所蔵している写本の多くは既にスキャンされているという。リストの中にはデジタル化が済んでいない写本もあったが、それもスキャンした後にデータをメールで送ると言われた。これからスキャンする写本の現物を見せてもらったものの、実際に写本そのものには触れることはなくデータを手に入れる運びとなった。

書店にて



書店に関して言えば、モスク近く、特にラージュヒー・モスク(Jāmi' al-Rajhī)周辺に集まっており、礼拝前後の時間には賑わいを見せている。古典的な法学書を中心に取り扱いがほとんどない。店員や客に研究書はないのかと尋ねると、ジャリールに行けばあると言われ

た。ジャリールとは、サウディアラビア全国に展開しているジャリール書店 (Jarir Bookstore) のことを指す。家電量販店と書店を組み合わせたような店で、店内は2つの部門に分かれている。書籍部門は大体の店の2階にあるが、客のほとんどは1階の家電を目当てにしているようである。とはいえ、広い面積には文学や児童書、研究書など、多数取り揃えている。イスラーム関連書籍はその一部であるが、ラージュヒー・モスク近くの書店でこちらに行くように薦められたことにも納得の品揃えであった。その中でもクラーン諸学に関するものが半分を占めるほどであり、需要の高さが窺えた。研究書の多くはサウディアラビア国内で出版されたもので、クラーン諸学以外にもハディース学や法学など、多岐にわたるジャンルの書籍を取り扱っている。研究書を求めて書店を巡る際は、ここにはないものを探すことから始めるとより効率的であろう。

以上、雑駁ではあるがリヤドの国立図書館・研究所・書店で実施した資料調査をまとめてきた。サウディアラビアにお

けるハンバル学派についてはこれまでに多くのことが論じられてきているため、ここからは、同国におけるスーフィズム文献について述べたいと思う。結論から言うと、ワッハーブ派が支配的な言説空間を構築しているリヤドでも、スーフィズム文献が禁じられているということは全くなかったと言える。今回訪問したキング・ファハド国立図書館やキング・ファイサルセンター、そして市街地の書店では、少ないながらもスーフィズム関連文献を確認することができた。尤も、興味や関心がそれほど持たれていないためか、絶対数は法学書等に比べると少なく、また図書館では利用者を見ることはなかった。それでも、ワッハーブ派のみならずハンバル学派の学者たちからも激しく批判されてきた、イブン・アラビーやその弟子たちの著作でさえも所蔵されているということがわかった。つまり、ここでは「ワッハーブ派対スーフィズム」といった二項対立的な理解は正しくないということである。しかし、当然ながら資料があるという事実だけではこうした理解に再検討を加えることはできない。一口にワッハーブ派と言っても様々な論

者が存在してきたし、同時にスーフィズムにも多様な側面がある。彼らが批判してきたスーフィズムとは何なのか、その変遷を追いながら、立証していく必要がある。コロナ禍が明けて、ようやく実行に移すことができた今回の調査が、その出発点となればと考える次第である。

本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2110 の支援を受けたものである。

私の研究室

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科グローバル地域研究専攻は、平和共生・生存基盤論講座、南アジア・インド洋世界論講座、イスラーム世界論講座の3つから成っています。文化人類学や政治学、文献学などの様々なディシプリンを軸に——時には架橋しながら——地域研究を行っています。毎週開かれるゼミ (通称水曜ゼミ) は、専門とする地域・時代・ディシプリンがそれぞれ異なる教員と学生が議論する場で、大変刺激的です。

4. 駒場中東セミナー開催報告

2023年9月18日(月)

「ハディース学とハディース学者に関する歴史的研究——『現地』の価値観と実証研究の齟齬についても」

森山 央朗 (同志社大学神学部教授)

本講演会で、同志社大学の森山は、自身の研究であるハディース・ハディース学者の実証研究について、「現地」の価値観と実証研究の間の感覚的な擦れ違いにも言及しつつ、研究の概要と動向、ハディース学の時間的変遷といった内容を、総合的に論じた。

2022年8月のウズベキスタンで、森山は同僚により現地のムスリムたちに「ハディースの研究をしている」人物と

して紹介され、二種類の気まずい経験をしたという。一つは、非ムスリムが何故ハディースの研究をするのか、という不信感を向けられたこと、もう一つは預言者様のお言葉を伝達してくれるのではないか、という誤った期待感を向けられたことである。そこで、自身の研究に関する説明の鍵概念を「ハディース」から「ウラマー」に変えたものの、研究内容はよく伝わらなかったようである。イスラームの信仰・価値観と結び付いたハディースのテキストを、イスラームの信仰を共有しない異教徒が外部から実証主義的文献史学の方法論で研究するという感覚は、「現地」では今一つ理解されない。

森山は、当初、在地名望家としてのウ

ラマーの社会史的研究に着手し、そこでの史料として分析した長大な人名録が、10世紀から12世紀にかけて、ハディース学の発展と連動して量産されるようになったことに着目した。そこから行き着いたのは、「ハディースの徒」と名乗った学者たちの知識実践、ハディース学書の編纂・流通・変遷に関する研究であった。最近では、10世紀から13世紀前半にかけてホラーサーン、ジバル、イラク、シリアなどで活躍し、9世紀から10世紀のホラーサーンに発する学統に連なるシャーフィイー派の「ハディースの徒」を取り上げ、彼らがハディースの真正性をどう判定し、ハディースをどう権威化したのか、そして、彼らが盛んに書き残した伝承列挙型の論説が当時の政治的・社会的現状をどう捉えていたのかを明らかにすることに取り組んでいる。

つまり、知識人を対象とした歴史学研究の一環として、「ハディースの徒」と彼らが担ったハディース学の展開を論じているのである。

森山は、ハディース学の歴史の概要を次のようにまとめた。預言者ムハンマドの没後、ムスリムたちは当然彼の教えや人物像を後世に語り継ごうとし、8世紀後半までにムハンマドに帰される様々な伝承が形成された。それらの伝承がハディースであるが、その中には偽伝や誤伝も多く、ハディースをめぐる知識体系も整っていなかった。その後、9世紀までにハディースの収集と記録の方法が定まり、ハディース集の編纂が本格化し、六書が成立した。10世紀から11世紀にかけて、ハディース伝達者の人物検証やハディースの真正性判定理論が整備されていき、ブハーリーとムスリムの両『正伝集』をはじめとする六書正典化も進んだ。こうしたハディースをめぐる知識体系、すなわちハディース学の発展を担ったのが、上述の「ハディースの徒」

であった。11世紀後半から13世紀前半までにかけては、「正伝」ハディースの無秩序な増殖に制限が掛かり、権威的なハディースの範囲が確定した。13世紀以降は、モンゴルの侵攻により「ハディースの徒」の学統が崩壊したことなどによって、ハディース学の発展は停滞することになった。

続いて森山は、ハディース学やハディース学者の歴史に関して、近代実証主義に基づく研究と「現地」の齟齬について語った。19世紀後半から20世紀の欧米を中心とする実証主義的な文献学や歴史学研究におけるハディースに関する議論は、ハディースをムハンマドに関する「同時代史料」とは認めず、ハディースの作為性を強調してきた。こうした近代実証主義的見解や正典化されたハディースの歴史性などの指摘に対する現代のウラマーの反論は、しばしば「感情的」に思えることもあるという。その一方で、近年の実証主義的研究が、古典ハディース学におけるハディース伝達者の

人物検証の方法や真正性判定理論の合理性を再評価する向きもある。とはいえ、現地ウラマーのハディース研究と実証主義的なハディース学／学者研究の間での対話は難しく、連繋の可能性は未だ模索段階にある。歴史学においてハディース学やハディース学者を研究することは、ともすると自明視・絶対視されがちな近代実証主義的な方法論の相対化、つまり最近の歴史学界において「言語論的転回」として議論されているような問題提起が期待できるが、「現地」の人々に、イスラーム教の信仰を前提としないハディースに関する研究がどのような意義を持つのかは未だ瞭然としない。

発表後の質疑応答では、近年の両正伝集の位置付けの変化や「ハディースの徒」という訳語の語感の適切性、13世紀ハディース学衰退論の見直しなどが議論の俎上に上がった。

(佐野元昭＝昭代・東京大学総合文化研究科修士課程)

5. バフワーン文庫便り

バフワーン文庫特任研究員

倉澤 理

2023年10月7日より、緊迫した状況が続いているパレスチナ・イスラエル情勢に関連し、文庫所蔵のユダヤ・イスラエル関係の書籍を今回は紹介させていただきます。

「中東」地域研究センター所属のバフワーン文庫は、イスラーム関連にとどまらず、中東のキリスト教、さらにはユダヤ・イスラエル関連の書籍も積極的に蒐集しています。

○イスラエル政治研究序説：建国期の閣議事録一九四八年／森まり子著
(524頁、人文書院、2020.3)

※駒場キャンパスではバフワーン文庫のみ所蔵（2024年1月下旬時点）
一本書は、紛争地特有の「政治性」を帯びる傾向にある建国期のイスラエル研究を、「政治性」を排した客観的な社会科学の土台の上に定直し直す基礎作業の一環として書かれた。言い換えればパレスチナ紛争について「こうあるべきだ」という倫理観や政治的価値判断と切り離して、実際に生じた歴史的事実を、その光と影、そしてその中間にある陰影も含めて、紛争の当事者ではない第三者の視点で学問的に検証しようとする試みである一

(17頁、序論より)

ベングリオンをはじめ、ユダヤ国家成立時の閣僚らのやり取りが記録された議事録を、上記のような学術的立場を保持しつつ、分析しています。

○反核の闘士ヴァヌヌと私のイスラエル体験記／ガリコ美恵子著
(vii+231頁、論創社、2017.1)

※東京大学での所蔵はバフワーン文庫のみ（2024年1月下旬時点）
イスラエル人男性との結婚を機に、イスラエルに居住した日本人の著者が、イスラエルでの居住体験を綴るとともに、イスラエルの核開発を告発したモロッコ系イスラエル人、モルデハイ・ヴァヌヌの半生と彼との交流を記しています。

○アンオーソドックス／デボラ・フェルドマン著；中谷友紀子訳
(341頁、辰巳出版、2021.3)

※東京大学での所蔵はバフワーン文庫のみ（2024年1月下旬時点）
ニューヨークのユダヤ教超正統派集団内で育った女性が、自らが成長した共同体の様々な内情を記するとともに、結婚・出産を経てコミュニティを後にするまでを

綴った半生記です。なお、著者の属していた「サトマール派」は反シオニズムの立場を標榜しています。

私が中東研究を志すに至ったのは、小学校3年生のとき、漫画『世界の歴史』でユダヤ人のことを知ったのがきっかけです。巻末のユダヤ人離散に関するコラムで、パレスチナからヨーロッパ、アジア、アメリカへと矢印が延ばされた地図がとても印象的だったのです。

大学受験では、最終的にユダヤのヘブライ語と同系統のアラビア語を専攻できる大学に進学することに決め（ユダヤの歴史を知ろうちにイスラームにも興味を持つとともに、ユダヤ偏重になりかけていた知識のバランスを取るという意味合いもありました）、アラビア語の学習とともに、イスラーム思想へと興味の対象を広げ、大学院ではイスラーム神学を研究対象とし、今日に至っています。

今回の惨禍が長引き、パレスチナ／イスラエル（あるいはユダヤ）という「分かりやすい」二項対立の図式が強調され続け、その固定化が進むほど、両者双方が、様々な集団を包含しているという複雑な内実が捨象されていくことに、私は憂慮を覚えます。

見方によっては「多様」とも「複雑」とも形容しうる中東地域を、あるがままに認識していただけるよう、様々な資料を取り揃えて参りたいと思います。

● UTCMES スタッフ紹介（2024年3月29日現在）

〈スタッフ〉

高橋 英海（センター長、兼務教授）
荻谷 康太（兼務准教授）
鈴木 啓之（特任准教授）
倉澤 理（バフワーン文庫・特任研究員）

大塚 修（兼務准教授）
森元 誠二（客員教授）
木村 風雅（特任助教）
瀬口 美加（事務補佐員）

〈UTCMES 運営委員〉

高橋 英海（委員長、総合文化研究科教授）
荻谷 康太（総合文化研究科准教授）
四本 裕子（総合文化研究科教授）
菊地 達也（人文社会系研究科教授）

大塚 修（総合文化研究科准教授）
清水 晶子（総合文化研究科教授・副研究科長）
黛 秋津（総合文化研究科教授）

〈スルタン・カブース・グローバル中東寄付講座運営委員会〉

高橋 英海（委員長） 大塚 修 荻谷 康太 橋川 健竜
清水 晶子 四本 裕子 黛 秋津

● 発行者情報 UTCMES ニュースレター VOL.24 2024年3月29日発行

発行：東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構中東地域研究センター（スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座）
〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 TEL：03-5465-7724 FAX：03-5454-6441
<https://park.itc.u-tokyo.ac.jp/UTCMES/>

編集：木村風雅

印刷：株式会社コムラ 〒501-2517 岐阜県岐阜市三輪ぶりんとびあ3 TEL：058-229-5858 FAX：058-229-6001